

# 瘤とり

楠山正雄

青空文庫



むかし、むかし、ある所に、一人のおじいさんがありました。右のほおにぶらぶら大きな瘤をぶら下げて、始終じやまそうにしていました。

ある日、おじいさんは山へ木を切りに行きました。にわかにはひどい大あらしになって、稲光がぴかぴか光って、ごろごろ雷が鳴り出しました。そのうち雨がぎあざあ降ってきて、うちへ帰るにも帰れなくなりました。どうしようかと思つて見回しますと、そこに大きな木のうろを見つけました。しかたがありませんから、その中に入つて、雨の小やみになるのを待つているうちに、いつか日はとっぷりくれてしまいました。

深い山の中には、もうきこりの木を切る音もしません。木のうろの外は、一面真っ暗やみの中に、すさまじいあらしが、うなり声を立てて通つていくだけです。

おじいさんはこわくつて、こわくつて、たまらないので、夜通し目も合わずに、うろの中に小さくなつておりました。

夜中になつて、雨がだんだん小降りになり、やがてあらしがぱったりやみますと、はる

か高い山の上から、なんだか大せいがやがや騒ぎながら、下りてくる声がしました。

おじいさんは今まで一人ぼっちで、寂しくつてたまらなかつたところですから、声を聞くことやつと生き返つたような気がしました。

「やれやれ、お連れが出来て有り難い。」

といいながら、そつとうろの中から顔を出してのぞいてみますと、まあどうでしょう、それは人ではなくつて、ふしぎな化け物が、何十人となくぞろぞろ出てくるのです。青い着物を着た赤鬼もいました。赤い着物を着た黒鬼もいました。それが山猫の目のようにきらきら光る明かりを先に立てて、どやどや下りてくるのです。

おじいさんは肝をつぶして、またうろの中へ首を引っ込めてしまいました。そしてぶるぶるえながら、小さくなつて息を殺してました。

鬼どもはやがて、おじいさんの居るうろの前まで来ますと、がやがやいいながら、みんなそこに立ち止まつてしまいました。おじいさんは、「おやおや。」と思いいながら、いよいよ小さくなつていきますと、そのうちのおかしらしいのが、真ん中に座つて、その右と左へ外の鬼たちがずらりと二かわに並びました。よく見ると目の一つしかないのや、口のまるでないのや、鼻の欠けたのや、それはそれは何ともいえない気味の悪い顔をした、い

ろいろな化け物が押しくらしをしておりました。

そのうちお酒が出ますと、みんなお互いに土器のお杯をうけたり、さしたり、まるで人間のするとおりの、楽しそうなお酒盛りがはじまりました。

お杯の数がだんだん重なるうちに、おかしらしい鬼は、だれよりもよけいに酔って、さもおもしろそうに笑いくずれていました。すると下座の方から、一人の若い鬼が立ってきて、お三方の上に食べ物物をのせて、おそろおそろおかしらの鬼の前へ持つて出ました。そして何かわけの分からないことをしきりにいつているようです。おかしらの鬼もお杯を左の手に持つて、おもしろそうに笑いながら聞いています。その様子は少しも人間と違つたところはありません。

やがておかしらは、

「さあだれか歌を歌う者はないか。踊りを踊る者はないか。」  
 といつて、そこらを見回しました。

やがておかしらのそばに座つていた鬼が、出し抜けに大きな声で歌を歌い出しました。するとさっきの若い鬼も、すその方から前へ飛び出してきて、さんざん踊りを踊つて引つ込みました。それから代わる代わる下座の方から、一人一人違つた鬼が立つてきて、同じ

ように踊りを踊りました。中には上手に踊ってほめられる者もあれば、ぶきような踊り方をして、みんなに笑われる者もありました。踊りがすむたんびに、ひんながばちばち手をたたいて、

「よいよい。」

とはやしました。

おかしらの鬼はその時、さもゆかいそうに高笑いをして、

「あツは、あツは。おもしろい、おもしろい。今夜のようなゆかいな宴会ははじめてだ。だがついでにだれか、もつとめずらしい踊りを踊って見せる者はないか。」

といいました。

おじいさんはさつきから、木のうろの中で体をこごめながら、それでもこわいもの見たさに、首だけのぼして外の様子をのぞいていました。そのうちに、いったいがひょうきんなおじいさんのことです。いつかこわいのも何も忘れてしまつて、見世物でも見ている気で、おもしろがつて鬼の踊りを見物してました。するうちに自分もだんだん浮かだれ出でてきて、今のおかしらの鬼のいったことばが耳に入ると、自分もひとつ飛び出して、踊りを踊ってみました。

しかしうつかり飛び出して行って、一口にあんぐりやられては大へんだと一度は思い返して、一生懸命がまんしていましたが、そのうち鬼どもがおもしろそうに手をたたいて、拍子をとりに出しますと、もうたまらなくなつて、

「ええ、かまうものか。出て踊つてやれ。食われて死んだらそれまでだ。」

とすっかり度胸をきめて、腰にきこりの斧をさして、烏帽子をずるずるに鼻の頭までかぶつたまま、

「よう、こりやこりや。」

といいながら、ひよっこりおかしらの鬼の鼻先へ飛び出しました。

あんまり出し抜けだものですから、こんどはおじいさんよりは、鬼の方がびつくりしてしまいました。

「何だ。何だ。」

「人間のじいじやないか。」

といいながら、みんなはそう立ちになつて騒ぎました。

おじいさんはもうすましたもので、一生懸命、のびたり、ちぢんだり、縦になり、横になり、左へ行き、右へ行き、くるりくるりと木ねずみのように、元気よくはね回りな

がら、

「よう、こりやこりや。」

とお酒に酔ったような声を出して、さもおもしろそうに踊りました。

だんだん鬼どももみんな釣り込まれて、いつしよに手拍子を合わせながら、

「うまいぞ、うまいぞ。」

「しつかりやれ。」

こんなことをいいながら、はちきれそうな大笑いをして、おじいさんの踊りに夢中になっていました。

踊りがすむと、おかしらも感心して、おじいさんに、

「こんなおもしろい踊りははじめてだ。じいさん、明日の晩も来て、踊りを踊るのだぞ。」

といいました。

おじいさんはとくになつて、

「へえへえ、おいつけがなくともきつとまいりますよ。今晚は何しろ急なことで、おけいこをして来ませんでしたから、明日の晩までには、ゆつくりおさらいをしてまいりましょう。」



こういうと、その時<sup>とき</sup>右手<sup>みぎて</sup>の三<sup>さん</sup>ぼんめに座<sup>すわ</sup>っていた鬼<sup>おに</sup>が口<sup>くち</sup>を出<sup>だ</sup>して、

「いいや、ああはいつても、その場<sup>ば</sup>になると横<sup>おう</sup>着<sup>ちやく</sup>をきめて出<sup>で</sup>てこないかも知<sup>し</sup>れません。約束<sup>やくそく</sup>を違<sup>ちが</sup>えさせないために、何か<sup>なに</sup>、しちに取<sup>と</sup>つておいてはどうでしょう。」

といいました。

おかしらは、

「なるほどそれはいいだろう。」

とうなずきました。

「それでは何<sup>なに</sup>がいいだろう。何<sup>なに</sup>を取<sup>と</sup>り上げておいたものだろう。」

と鬼<sup>おに</sup>どもは、わいわい相<sup>そう</sup>談<sup>だん</sup>をはじめました。

「烏<sup>え</sup>帽子<sup>ぼうし</sup>がいい。」という者<sup>もの</sup>もありました。

「斧<sup>おの</sup>はどうだ。」という者<sup>もの</sup>もありました。

おかしらはみんなの騒<sup>さわ</sup>ぐのを止<sup>と</sup>めて、

「いや、何<sup>なに</sup>よりもいちばん、あのじいさんのほおの瘤<sup>こぶ</sup>を取<sup>と</sup>るのがいいだろう。瘤<sup>こぶ</sup>は福<sup>ふく</sup>のあ  
るものだから、じいさんのいちばんだいじなものに違<sup>ちが</sup>いない。」

といいました。

おじいさんは心の中こころなかでは、「しめた。」と思おもいながら、わぎとびつくりした風ふうをして、「おやおや、とんでもないことをおつしやいます。目玉めだまを抜ぬかれましても、鼻はなを切きられましても、この瘤こぶを取とることだけはどうかごかんべん下くださいまし。長年ながねんの間あいだ、わたくしが宝たからのようにしてぶら下さげている、だいじなだいじな瘤こぶでございますから、これを取とり上げられましては、ほんとうに困こまってしまいます。」

といました。

鬼おにのおかしらはこれを聞きくと、

「それ見みろ。あのとおり惜おしがっている瘤こぶだ。あれに限かぎる、取とり上げあておけ。」

といました。

手て下したの鬼おにはすぐそばへ寄よつてきて、

「それ、とるぞ。」

といいながら、ほきりと瘤こぶをねじ切きつてしまいました。でも少すこしも痛いたくはありませんでした。

ちようどその時とき、夜よが明あけて、からすがかあかあ鳴なきました。

「やあ、大たいへん。」

鬼どもはびつくりして、立ち上がりました。

「明日の晩はきつと来い、瘤を返してやるから。」

こういいながら、みんなあわててどこかへ消えていきました。

おじいさんはその後で、そつと顔をなでてみました。そうすると、長年じやまにしていた大きな瘤がきれいに無くなって、後はふいて取ったようにつるつるしていました。

「これは有り難い。ふしぎなこともあるものだ。」

おじいさんはうれしくつてたまらないので、早くおばあさんに見せてよろこばしてやろうと、首を振り振り、急いでうちまで駆けて帰りました。

おばあさんは、おじいさんの瘤がきれいに取れているので、びつくりして、

「おや、瘤をどこへやったのです。」

と聞きました。おじいさんはこういうわけで、鬼がしちに取って行ったのだといいました。おばあさんは、

「まあ、まあ。」

と行って、目をまるくしておりました。

## 二

さてこのお隣のうちにも、これは左のほおに、やはり同じような瘤のあるおじいさんが  
ありました。おじいさんの瘤のいつの間にか無くなったのを見て、ふしぎそうに、

「おじいさん、おじいさん、あなたの瘤はどこへいきました。だれか上手なお医者さま  
に切ってもらったのですか。どこだかそのお医者さまのうちを教えてください。わたしも行  
って取ってもらいましょう。」

とうらやましそうにたずねました。

おじいさんは、

「なあに、これはお医者さまに切ってもらったではありません。ゆうべ山の中で鬼が取  
っていったのです。」

といいました。

するとお隣のおじいさんはひざを乗り出して、

「それはいったいどういうわけです。」

と、びっくりした顔をしました。

そこでおじいさんは、こういうわけに踊りを踊ったら、後でしちに取られたのだといって、くわしい話をしました。お隣のおじいさんは、

「いいことを聞いた。ではわたしもさつそく行つて踊りを踊りましょう。おじいさん、その鬼の来る所がどこだか、教えておくんさい。」  
 といいました。

「ああ、いいとも。」

とおじいさんはいつて、くわしく道を教えてやりました。

おじいさんは大そうよろこんで、あたふた山へ出ていきました。そして教わつた木のうちの中へ入つて、こわごわ鬼の来るのを待つていました。

なるほど、話に聞いたとおり、夜中になると、何十人となく青い着物を着た赤鬼や、赤い着物を着た黒鬼が、貂の目のようにきらきら光る明かりをつけて、がやがやいいながら出てきました。

やがてみんなはゆうべのように木のうろの前に座つて、にぎやかなお酒盛りをはじめました。

その時おかしらの鬼が、

「どうした。ゆうべのじいさんはまだ来ないか。」

「いいました。」

「どうした、じいじ、早く出てこい。」

手下の鬼どももわいわいしました。

お隣のおじいさんは、それを聞いて、「ここだ。」と思つて、こわごわうろの中からはい出しました。

するとひとりの鬼が目ばやく見つけて、

「やあ、来ました、来ました。」

「いいました。」

おかしらは大よろこびで、

「おお、よく来た。さあ、こつちへ出て、踊れ、踊れ。」

と声をかけました。

おじいさんは、おつかなびつくり立ち上がつて、見るからぶきような手つきをして、でたらめな踊りを踊りました。おかしらの鬼はふきげんな顔をして、

「今日の踊りは何だ。まるでまづくつて見ていられない。もういい。帰れ、帰れ。おい、

じじいに、ゆうべのあずかりものを返してやれ。」

とかんしやく声でいいました。

すると下座の方から若い鬼が、あずかつていた瘤を持って出て、

「それ、返すぞ。」

とわめきながら、瘤のない右のほおへぼんとたたきつけました。

お隣のおじいさんは、

「あつ。」

とさけびましたが、もう追つつきませんでした。両方のほおへ二つ瘤をぶら下げて、

おいおい泣きながら、山を下つて行きました。





# 青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 瘤とり

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>